安楽寺寺報

聞光

第102号
涅槃会号

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL：0823-21-7561

一枚の写真

信楽　慧

この写真は、10年ほど前に行った北海道旅行での「日本銀行旧小樽支店金融資料館」の写真です。この頃、私は写真をはじめて数年ほどでしたが、いくら写真を撮っても、自分がいいと思う写真が撮れなくて悩んでいました。

それがこの旅行の際私が写真を初めた時の理由、目的を考える事があり、私は最初「写真を撮ることそれ自体が楽しく」、「自分の見ている世界を表現したい」のだったことを思い出し、初心に戻ることができました。その後楽しくいい写真が撮れるようになりました。こういった経験から、「初心に戻って、目的・背景を意識する」ということはとても大切なことだと思っており、また仏道を歩む上でも「仏教あるいは宗教とは何のために出来て何をするものなのか？という目的、背景を理解することがとても大切だと思っています。

そこで、今回は「仏教・宗教の目的と背景」について考えてみました。

「宗教」については様々な解釈がありますが宗教学的な立場からは「宗教とは、人間生活の究極的な意味を明らかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつ人々によって信じられている営みを中心とした文化現象である」（『宗教学』岸本英夫著）と定義されています

つまり仏陀は「生きること・老いること・病気になること・死ぬこと」という人間問題の究極的な解決として、四苦の苦しみからの開放を求めて修行を行い、悟りをひらかれました。このことからも基本的に仏教が人間の問題、苦しみの解決を目指しているものであることが分かると思います。

そして、様々な宗教は人間の問題の解決方法の違いで大きく三つに分類することができます。

1つ目は、祈祷など超自然的な力に頼って問題の解決をはかろうとする宗教です。

2つ目は、教えによって自分を改変して問題の解決をはかろうとする宗教です。

3つ目は、自分の価値観とは別の価値観を体得することにより日常的価値を受け入れながら問題の解決をはかろうとする宗教です。

その中で、仏教・浄土真宗は3つ目の宗教に該当します。それは「親鸞聖人の教え、浄土真宗を学ぶとは、何よりも、その教えにふれることを通して自己自身が少しずつ育てられてゆくことだと思います。」（『真宗入門』」信楽峻麿 著）と言うように「教えにふれ、自己を深く省みること（気づき）による自己成長」こそが問題の解決にあたると思います。自己を深く省みて小さな気づきを重ねていくことで、少しずつ人間が成長していくのです。

ちょっと脳トレ

ひらがな並び替え
どんな単語になるかな？

①～③のひらがなを並び替えて単語を作ってください。

① とべおんう

② くはぶかんつ

③ てかょういしき

編集後記

今回の聞光では、「初心を忘れないこと」の大切さを学びました。

「初心を忘れずに〇〇をします」など実際によく聞く言葉だと思います。しかし、本当にそれを実践している人はどのくらいいるのでしょうか？

せわしない日常の中で、皆さんは様々な経験や想いを積み上げています。そんな中で一歩立ち止まって自分がなぜそれをしようとしたのか、どうしてこれはあるのかと思い返す時間を作ることは、考えや目標を整理することができ、次の学びにつながると思います

今回の1・2面にもあった通り、一度初心を思い出す時間を取ってみてください。

めぐみ

ちょっと脳トレの答え
①おんんとう　②はぐかつかん　③かてけいきょう

安楽寺マンガ通信

その52　信楽めぐみ作

このように、目的や背景を理解して様々な教えや解釈を聞いていくことで教えを深いレベルで正しく理解することができると思いますし、自分の進むべき方向を選ぶ手助けともなってくれると思うのです。

例えば、「善人なほもつて往生をとぐいはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや。この条一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。」と『歎異抄』第三条のお言葉があります。

「善人でさえ浄土に往生することができるのです。ましてや悪人はいうまでもありません。しかし一般的には、逆に悪い人が救われるなら良い人が救われないわけがない。というのでしょうが、それは阿弥陀様のお心からいえば違っているのです。」ということです。

ここで明確に世間の話と仏教の話は違っていることを示されています。にもかかわらず、この話を聞いて「悪人が救われるなら何をやってもいいよね」と解釈する人がいます。それは「悪人」の定義はもちろん、仏教の目的や背景を理解していない解釈です。宗教的な善人と悪人の意味は、この歎異抄三条の後半にも出てきますが、ここでいう宗教的な善人とは「自分のことを善人だと思っている、自分で功徳を積むことができると思っている人」のことを指し、悪人とは「どんな修行をしても煩悩を捨てられない、自分を悪人と自覚している人」のことを指します

その上で、仏教が目指した目的は苦しみからの解放であり、その苦しみの因が、悪業煩悩であるとすれば、そのような悪や煩悩を勧めるようなことになるはずがありません。

仏教の目的・背景を知っておくと、この歎異抄の一節を読んだ時に「ここに記されている悪人」とは世間一般的（倫理的）にいう悪人という意味でないということはすぐに理解できることかと思います。

仏陀の教えには様々な解釈・宗派があり、どれが正しい、間違いというわけではないですが「そもそも宗教はなぜおこったのか？仏陀がなぜ修行を行い悟りをひらかれたのか？」という目的と背景を理解することで、様々な教えやお話を正しく理解することができると思います。

「死を思う」

2月7日の朝日新聞、声の欄に「死を思うことは、恐ろしいけれど」という、吉川結芽（大阪　13）さんの投稿が掲載されていました。考えさせられる投稿なので、全文掲載します。子や孫に問われて私たちはどう答えるのでしょうか。考えてみたいと思います。

「死んだらどうなるんだろう。私はよくそんなことを考える。天国や地獄という死後の世界が本当にあって、そこで存在し続けることができるのなら、そう願いたい。けれども死によって私の意識も心も、何もかもが永遠に消え失せてしまうとしたら…。いま、これを書きながらも私は底なし沼に沈んでいくような恐怖に襲われている。そして「まだ私は若いから」と思考を中断するのだ。

他の人はどうだろう。私が敏感なのかと思ったが、まわりの友人に聞いてみるとやはり、恐ろしくて考えるのをやめるという。この恐怖からどうやって逃げたらいいんだろう。大人になったら、怖くなくなるのだろうか。

死は、この世で命を授けられた生き物全ての宿命なのだと、改めて思う。生きるということは、死へ近づいていくこと。恐ろしいが、しかしそれに気づいたからこそ、この命を何かのため誰かのために使い切りたいとも思う。死ぬ時、私は十分頑張ったと思えるような人生にしたい。そのために、私はどうしたらいい？答えを見つけるべくいまこの時を生きていこうと思う。」

暮らしの中の仏教語

「一期一会（いちごいちえ）」

「一期」というのは仏教語で「一生」のことです。「一会」というのも仏教語で説法・仏事などの一つの集まりをいいます。しかし、「一期一会」の成句は仏典にはなく、千利休の弟子山上宗二の著『茶湯者覚悟十体』にある次の文章から出たものです。しかしこの言葉は仏教精神に基づくことは明らかです。

「そもそも茶湯の交会は、一期一会といひて、たとえば、幾度同じ主客交会するとも、今日の会にふたたびかへらざる事を思へば、実に我一世一度の会なり、さるにより、主人は万事に心を配り、いささかも粗末なきよう、親切、実意を尽くし、客も次の会まで逢ひ難きをわきまへ亭主の趣向は一つもおろそかならぬを感心し、実意をもって交わるべきなり、これを一期一会という」

じつにすばらしい思想です茶の湯の集まりに限らず全ての集会、特に国会などがこうあったらどんなにいいことでしょうか。

安楽寺法要案内

--春彼岸会法要--

日時　３月２６日(土)朝席・昼席
講師　呉　本通り　明円寺
　　竹田　嘉円　先生

--宗祖降誕会法要--

日時　５月２１日(土)朝席・昼席
講師　能美　勝善寺
　　法林　英俊　先生

--永代経法要--

日時　６月１８日(土)昼座
　　６月１９日(日)朝座・昼座
講師　長門　浄土寺
　　荻隆　宣　先生

時間　朝座10:00～・昼座13:00～
会場　安楽寺本堂
※昼食のご用意ができませんので、必要な方は各自ご用意お願いいたします。
※新型コロナウィルスが感染拡大した場合、急遽中止する場合があります。

お念仏のしずく

ひとすじの白い道…

仏法の極意、仏教の教えを学ぶについて、一番肝要なことは、まず一つは、現実のわが身を直視内観することです。さっきの善導大師の例え話でいうならば、私たちは皆やがて日が暮れる道を歩いているのです。だからまだ日の高いときに、真っ暗にならない間にこそ、私たちのこれからの宿る世界、帰るべき家を、しっかりと見極めよと仰せになるのですね。やがて暮れていく人生をお互いが歩いている。しかもその日暮らしは、まことにお粗末な、火の河、水の河の逆巻くような煩悩ばかりの日暮らしをしているということなんです。

「かえるも死せん、とどまるも死せん、いくもまた死せん。」これを昔の学者は「三定死（さんじょうし）」と呼んでいます。どっちみち、私たちは手をあげざるをえない。どんなに叫ぼうとも、泣こうとも、寿命が尽きれば死ななきゃならん。どれほど肉親の愛情のきずなが深かろうと、ついに最後は別れていかなきゃならん。そういう私の人生のぎりぎりのところ、いずれにしても、一人で寂しく死んでいかなきゃならんという、この現実が、どれだけ身にしみて私たちに自覚できているのか。このことが最も大切な、仏法を学ぶについての極意です。

『ひとすじの白い道』